

「大神方言の強調辞 tu の位置づけ」

2022年12月4日

国立国語研究所プロジェクト合同研究会

金田章宏

要旨

1. 述語に使用された動詞中止形 (numi) と同音の焦点化助辞の tu 過去形 (numitu) は助辞のついた形もふくめて語形とする。助辞を語形の一部とする。

これとの関係でみてきたこと。

2. 動詞述語文ののべたて肯定文においては、焦点化助辞 tu の使用が基本となっている。その結果、それを使用しないことによって基本とは異なるスタイルの文になる。このスタイルは文法的な手段によって表現される。

焦点化助辞は主語や補語、修飾語などの文の成分にあらわれる主体や対象などのなかから、そのなにかをとりたてて焦点化する際に使用される助辞である。その使用によって、とりたてられた対象は<前景化>する。ぎゃくに、とりたてて焦点化する対象がなければ焦点化助辞は使用されず、前景も後景もない平板な文になる。

大神方言では形容詞述語文でこうした現象がみられる。また、名詞述語文や動詞述語否定文においても同様の現象がみられる。

一方で、動詞述語肯定文は焦点化助辞 tu のついた文が基本=<ふつう>になっているように見える。その結果、焦点化助辞 tu のない文は<ふつう>ではない、スタイルを異にする<弱化>された<簡単な言い方>の文として位置づけられることになる。

m語尾述語は焦点化助辞 tu のある文には使用されない述語形で、この文も<簡単な言い方>の文に含まれる。

動詞否定文や形容詞述語文ではこのm語尾述語文が基本で、焦点化助辞 tu の付加によって<強化>され、₁語尾述語文になる。

動詞述語文には焦点化助辞 tu のない₁語尾述語文もあるが、₁語尾述語は焦点化助辞 tu を前提にした語形なので、m語尾述語の<簡単な言い方>よりは基本寄りである。

大神方言には焦点化助辞 tu を複数もつ文がみられるが、焦点化助辞 tu のついた文が基本=<ふつう>になることによって生じた現象とみてよいだろう。

1 について

金田 2022 では焦点化助辞 tu の終助辞化についてつぎのように書いた。(▽~△)

▽○動詞述語末の焦点化助辞 tu の終助辞化

文法的な要素である焦点化助辞 tu が、動詞終止過去形にくっついてさらに文法化をおこし(焦点化助辞としての意味が弱まり)、終助辞化する現象がみられる。

(略)

しかし、次のような述語動詞のみの文では<焦点化>そのものが意味をなさなくなるだろう。したがって、焦点化助辞は必要ないはずなのだが、動詞だけでは落ち着かないようで、焦点化助辞をつけることで述語らしくなる。

・ mi:=tu. 述語動詞に焦点化助辞 ★分析形の補助動詞脱落ではない! (numtu staŋ / numitu)

mi:=tu.見た。いま、飛行機が飛んでいるのを。

N:] mi:=tu.うん、見たよ。<きのうのテレビ見た？

N: [mi:=tu.うん、見た。いま一瞬のなにかを ×mi:taŋ

a: [mi:=tu.あ、見た。あの人。見た瞬間。×mi:taŋ△

このように、述語動詞 tu のかたちは、焦点化助辞から文法化がすすんで終助辞化しているのでは、という見方だったが、終助辞化を経由しているかどうかは別として、tu はもはや語形の一部とみるべきではないか、ということで、再検討する。

一般に、強調辞=焦点化助辞はくっつき先の文の成分をほとんど選ばない(一部の語彙とは共起しないようだ)。主語にも補語にも修飾語にも述語にもつく。その意味では、これのついた形を「語形」とみることはできない。

しかし、ある条件のもとでは、この助辞が必須、義務的であることがある。そのばあいにはこれを語形の一部とし、全体でひとつの語形とみるべきではないか、ということである。

▼完成相過去形について

・完成相過去形には次のものがある。本発表で対象とする強変化(子音語幹)動詞と弱変化(母音語幹)動詞のみをあげる。

・テンス対立あり (fau 食べる)

fautam 焦点化助辞のない文の述語

(~tu) fautaŋ 述語以外の文の部分に焦点化助辞のある文の述語

fautu sta₁ 焦点化助辞を含む分析的な述語 (fautu s₁)

・テンス対立なし (過去形のみ)

fai(tu) 中止形と同音の述語

☆強変化(子音語幹)動詞

o_ffautam / (~tu) fauta₁ / fai(tu)

u[rimai] fautam.この人も食べた。焦点化 tu なし。簡単な言い方

sutaka fautaripa[tu] aNmai fauta₁.兄さんが食べたから私も食べた。

aNmai] fautu sta₁.私も食べた。

ara: pSti:kS]te:Ntu fai.私は一つだけ食べた。(一つしか)

stumute: pe:pe: munu:pa: fau]tam? > [faitu.けさは早くご飯を食べた? >食べた。

☆弱変化(母音語幹)動詞

o_mi:tam / (~tu) mi:ta₁ / mi:(tu)

mi:]tam.見た。いま、飛行機が飛んでいるのを。焦点化 tu なし。簡単な言い方

ju[pitu] piNnaki imi: [mi:ta₁.夕べ変な夢を見た。

N: mi:]tu sta₁.うん、見たよ。<きのうのテレビ見た?

k₁nu]maitu mi:.きのうも見た。

mme] mi:tu.もう見た。

▼過去形 (fai / numi / mi:) に焦点化助辞 tu がつく条件

中止形と同音の過去形を使用した過去テンスの文では、以下の点が基本である。

・主語がガ格に対応する ka 格のばあい、主語にはすでにある種のとりにて性(新旧の新?)があるの、述語動詞は焦点化されず、主語と述語だけの文の場合は ka 格主語に焦点化助辞 tu がつく。(二人称文で主語の焦点化助辞 tu をはずすと、のべたて文から命令文にかわる。)

vvakatu] numi.あなたが飲んだ。

×vvaka] numitu.非文

(vvaka] numi.あなたが飲め。)

karikatu] numi.あれが飲んだ。

×karika] numitu.非文

・主語がハとりたてに対応する ja とりたて形のばあい、主語に焦点化助辞 tu はつかないが、ja 以外のとりたて助辞のあとには焦点化助辞 tu がつきうる。

ka[rimaitu] k!isi.あれも来た。

karikamitu] k!isi.あれまで来た。

kanu] upummata:si[tu] puturi.あのおばあまで踊った。

kanu] upummata:simai[tu] puturi.あのおばあまでも踊った。

・ja とりたて形主語以外に焦点化の対象となる文の部分があるときは、焦点化助辞 tu は述語につかず、その文の部分に焦点化助辞 tu がつく。主語以外に焦点化の対象となる文の部分があるのに焦点化助辞 tu を述語につけると非文になる(なりやすい?)。

kare:] kiNc!iku:[tu nis]mai.あれは財布を盗まれた。直接補語

kare:] taukara:N[tu] pakɣu fu[mai.あれはだれかに足を踏まれた。間接補語

iciro:ja] ikSmai numaNsuka[tu] saki: [kai] k!isi.一郎はいつも飲まないけど酒を買ってきた。従属節の述語

・述語動詞のみのばあいは、述語動詞に焦点化助辞がつく。

a: [mi:tu? > N: [mi:]tu.見たか? > うん、見た。一瞬のなにかを×mi:taɣ

a: [mi:]tu.あ、見た。あの人。見た瞬間。×mi:taɣ

N:] mi:tu.うん、見たよ。<きのうのテレビ見た?

[fai]tu? > N: [fai]tu.食べたか? > うん、食べたよ。

stumute: pe:pe: munu:pa: fau]tam? > [faitu.けさは早くご飯を食べた? > 食べた。

つまり、焦点化の対象となる文の部分がない述語動詞のみの文では、述語動詞に焦点化助辞がつくのが基本ということである。

強変化動詞ではここで過去形(tu)と命令形のミニマルペアができ、弱変化動詞では過去形(tu)と勧誘形のミニマルペアができる。

★強変化動詞

ma:Nti:tu] numi.ほんとうに飲んだ。飲んだ瞬間。飲まないと思ったのに。

numi]tu.飲んだよ。

[numi.飲め。いますぐでもいい。

tu:] m[me] nu[ma.さあ、そろそろ飲もう。勧誘

mma]ka[tu] m:na fai.母がみんな食べた。
fai]tu? > N: [fai]tu.食べたか? > うん、食べたよ。
N]: [fai. うん、食べろ。 < 食べていい?

ja:] askatu iki.祝いをしに行った。
iki]tu.行ったよ。
ma:takina] iki.いっしょに行け。

p]ri:ritu] ukami.座って拝んだ。
ukami]tu.拝んだ。
imN[kai] ukami.海に拝め。

k]nu:] kuziNtu niv]vi.きのうは九時に寝た。
nivvi]tu.寝た。
si:s]liti:] nivvi.おしっこをしてから寝ろ。

taru:ka] klisis]liti:[tu] ziru:ja [peri.太郎が来てから次郎は帰った。
peri]tu.帰った。行った。ここにはない。
pe:pe:] peri.早く帰れ。

a[katu] numasi.私が飲ませた。
numas]i]tu.飲ませた。
tu:si] numasi.自分で飲ませろ。

ma:Nti:tu] ffi.ほんとうに降った。いま降っている。
ffi]tu.降った。
amimai] ffi.雨も降れ!

★弱変化動詞

ju[pe:] piNnaki imi:tu [mi:.夕べは変な夢を見た。
a: [mi]:tu.あ、見た。あの人。見た瞬間。
ma:takina] mi:.いっしょに見よう。勧誘
uri:pa:] mi:[ta kuri:] mi:ru.これを見ないでこれを見ろ。

ki:[ja] pe:pe:[tu] uki.今日は早く起きた。
stumute: pe:pe: uki]tam? > [uk]i]tu.けさは早く起きた? > 起きたよ。

ata: ma:takina] u[ki.あしたはいっしょに起きよう。

zaskɿN] utaɿ pStu: m:na[tu Nki.座敷にいた人たちはみんな帰った。

Nki]tu.帰った。ここにいない。

ma:takina] Nki.いっしょに帰ろう。

★弱変化動詞／強変化動詞

kanu] innu[tu] sɿni.あのイヌが死んだ。

sɿ]nitu.死んだ。

ma:takina] sɿni.いっしょに死のう。勧誘

(弱変化型)

sɿni] kumata.死にそうだ。このネコは

sɿni]tam.死んだ。

sɿ]niti.死のう。意志

pe:pe:] sɿniru.早く死ね。

(強変化型)

unu] maju: [sɿn] kumata.このネコは死にそうだ。

sɿn]tam.死んだ。

sɿ]nati.死のう。意志

]sɿni.死ね。*これも同音になる。

▼非文の具体例

◇つけマチガイ>>非文 ほかにつけるべき！

fkuna]su:ju[tu] turi k!lisi fai.フクナ (ハルノノゲシ) を取ってきて食べた。

fkunasu:ju turi k!lisi[tu] fai.フクナを取ってきて食べた。

fkuna]su:ju[pa:] turi k!lisi[tu] fai.フクナを取ってきて食べた。

×fkunasu:ju turi k!lisi faitu.フクナを取ってきて食べた。非文

mma:mmatu] fai.おいしく食べた。

×mma:mma faitu.おいしく食べた。非文

▽mma:m]ma fai.おいしく食べた。簡単な言い方。tu があつた方が詳しくて、きれい。
文法的には命令になるが、場面に支えられて過去の意味が成立する。

mma:m]ma fai.おいしく食べろ。

上の例の非文は、たとえば大神方言を学習した非母語話者が使用した場合、発話の意図はくみ取ってもらえるだろう。

◇つけない>>非文 つけるべき！

natanutu] uti.涙が落ちた。(ka 格の条件に準じる)

nata:] utitu.涙は落ちた。

×nata:] uti.意味不明。発話の意図が分からない。

u[ti]ru.落ちろ。

mme] umuititu.思い出した！

×mme] umuiti.意味不明。発話の意図が分からない。

ma:takina] umuitasi.いっしょに思い出せ。

ma:takina] umuititi.いっしょに思い出そう。

ikSmaitu] umuitas].いつも思い出す。

・結論

ここでの焦点化助辞 tu は過去形であることを明示する機能をはたしているの、語形の一部として位置付けるべきではないか。つまり、焦点化助辞 tu のあるのもないのも、ともに語形としてもよいのではないか。

(述語以外の文の部分については、焦点化助辞があってもそれをふくめて語形とはしない。)

2について

▼<簡単なあっさりした言い方>とは

日本語でいえば、書き言葉のていねい体・ふつう体に対する話し言葉のような位置づけか。話し言葉でも、ていねい体に対応するほうは書き言葉に近い。一方、話し言葉のふつう体に対応するほうは、名詞や動詞などの一語文、格助辞の省略、述語の省略などがみられるが、これらは、「文全体は言わない」という手段である。あるいはコリヤ(一)、シテル、シチャウのような融合形もそうだろう。ぎゃくに付加されるのは書き言葉にはない間投詞や終助辞である。あるいは、文はそのままに声の強弱や速度、イントネーションによって表現される声の<表情>。日本語の話し言葉ではこれらによって、はっきりした詳しい言い方と、簡単なあっさりした(ときにぶっきらぼうな)言い方を使い分けるようにみえる。

これに関連して、日本語教育ではつぎのような説明がされている。

★スピーチレベルの意味

スピーチレベルとは、話し方の丁寧さのレベルのこと。

スピーチレベルシフト、スピーチスタイル、スピーチスタイルシフト、スタイルシフトなど

様々な言い方があります。

スピーチレベルが切り替わるとは、普通体から丁寧体になったり、丁寧体から普通体になったりすること。(<https://www.hamasensei.com/code-switching/>)

・日本語

書き言葉：ていねい体とふつう体

話し言葉：ていねい体は(まだ)書き言葉に近い。ふつう体ではさまざまな省略や融合がおり、間投詞や終助辞も使用する。

・大神方言

一部に省略もあるが、基本的には文法的な手段で<詳しい・ていねい>と<簡単・あっさり>を使い分ける。

・なぜ動詞述語肯定文か

動詞述語文と形容詞・名詞述語文の基本的な違いは、時間の中に配置されるできごとをあらわすか、性質や状態などをあらわすかの違いである。できごとの成立には、主体や直接対象や間接対象、時間や場所などが関与し、それらが焦点化の対象となり得る。

日本語では・・・

動詞述語文：主語はガが基本

形容詞・名詞述語文：主語はハが基本

大神方言では、結果としてできごとの存在をあらわす動詞述語文の肯定文は焦点化助辞 tu の存在が基本になっている。

>>そのため、焦点化助辞 tu のない文は<簡単な言い方の文>になる。

これは基本的にできごとをあらわす動詞述語文の肯定文についてであり、動詞否定文や形容詞述語文(や名詞述語文)ではまだ焦点化助辞=強化が基本的のようにみえる。日本語のハとガに形の上で対応するのは ja と ka/nu だが、動詞否定文や形容詞述語文の述語形もこれに対応しているようにみえる。ja-~m, ka(tu) / nu(tu)-~₁

ただし、動詞述語文の肯定文でも<簡単なあっさりした言い方>をしたいときには、述語動詞の焦点化助辞をはずすことができる。

>>これは基本を外れた、ふつうではない表現。ムード的に別の用法。スタイルの違い。

・日本語でいう「スピーチレベル」と異なる点：

ていねいさは場面や相手によって切り替えられるようだが、大神方言では、この使い分けができる相手に対して、どう使い分けるかということであって、聞き手の問題ではなく話し

手側の問題である。したがって、基本から<下げる>言い方については、目上に対してははじめからこの選択肢はない。

これまで、焦点化助辞の使用を<ふつう=基本>に対する(部分的な)<強化>と考えていたが、大神方言の動詞述語肯定文での使用状況を見ると、それが当てはまらないようにみえる。大神方言では日本語のとりたての用法はことなり、焦点化助辞の使用が<ふつう>になっていて、焦点化助辞を使用しないことが(全体的な)<弱化>になっているようである。(概略だが、動詞のべたて文の四分の三以上に焦点化助辞がついているように見える。焦点化助辞の使用がより少ない否定文をのぞけばもっと比率が上がるだろう。)

<簡単なあっさりした言い方>になるいくつかのタイプ

○tu なし

述語動詞のみの過去テンスの文で焦点化助辞をつけないとふつうでなくなる。焦点化助辞をつけなかったことによって別のスタイル=<簡単なあっさりした言い方>になる。

mma]ka[tu] m:na fai.母がみんな食べた。

fai]tu? > N: [fai]tu.食べたか? > うん、食べたよ。

mma:mma] fai.おいしく食べた。簡単な言い方。

N]: [fai].うん、食べろ。<食べていい?>

taro:ja ki:mmanu] nu:] munu:[pa: ɲakara] narai.太郎は竹馬の乗り方を親から教わった。★pa:があるので焦点化されている。

taro:[ja] ututunu jami[:ɲ] kutu: [ɲakara] kSski.太郎は弟が病気になっていることを親から聞いた。

○tu なし ɲ 語尾述語 (焦点化助辞の存在を前提にした語形なので、m 語尾述語よりも、より<ふつう>か)

ututuNkai] su:ju [fi:]sɲmitaɲ.弟に野菜を食べさせた。

ututuNkaitu] su:ju fi:sɲmitaɲ.弟に野菜を食べさせた。

panassupa: aɲri] kSskasi:taɲ.話をして聞かせていた。

kaɲtinnu] kuritaɲ.紙幣を交換した。

fau] ja:s[ka] ne:N [ase]:taɲ.食べやすいようにやってあった。

upuɲamai] meri samaitaɲ.オジイも召し上がった。

panassu:[na:] aɲri:taɲ.話をずつ話していた。話したりしていた。多回性

mikɲu[na:] numi:taɲ.水を飲んだりしていた。多回性

mikɟu] numina:] utaɟ.水を飲んだりしていた。多回性
munu:na:] fai utaɟ.ものを食べたりしていた。多回性
munu: faina:] utaɟ.ものを食べたりしていた。多回性
kare: k!isina:] utaɟ.あの人はよく来ていた。多回性

・ m 語尾述語

ふつうではない簡単な言い方。モーダルな違いがあらわれる。

▽kɟnumai] iciro:sui numtam.きのうも一郎と飲んだ。簡単な言い方。
kɟnumai] iciro:sui[tu] numtaɟ.きのうも一郎と飲んだ。
kɟnumai] iciro:sui[tu] numi.きのうも一郎と飲んだ。
▽karimai] s!isi:m.あの人も知っている。簡単な言い方。
karimai] s!isitu uɟ.あの人も知っている。
karikatu] s!isi:ɟ.あの人が知っている。
▽]fftam.降った。簡単な言い方。
aminu[tu] fftaɟ.雨が降った。
]fftu staɟ.降った。
▽u[rimai] fautam.この人も食べた。
u[rimai] faitu.この人も食べた。
▽a[Nmai] katitam.私も耕した。
a[Nmai] katitu.私も耕した。
a[katu] katitaɟ.私が耕した。
▽mi]:tam.見た。いま、飛行機が飛んでいるのを。
mi]:tu.見た。いま、飛行機が飛んでいるのを。
pukapuri] pasiN[tu] mi:taɟ.プカプリの間で見た。クジラを。浅瀬の名前
▽ju]mtam.読んだよ。読み終わって返すとき。
ju]mitu.読んだよ。読み終わって返すとき。
▽kire:s]tam.蹴った。足で
kire:]situ.蹴った。足で
▽tukɟmi]tam.終わった。
mme] tukɟmitu.もう終わった。
tukɟmitu] staɟ.終わったよ。
▽ki:mai] appɟtam.きょうも遊んだ。
ki:mai] appɟtaɟ.きょうも遊んだ。
ki:mai] appitu.きょうも遊んだ。
▽pi]:tam.酔った。私も

numtaripa[tu pi]:ta₁.飲んだから酔った。
k₁nu: pi]:tu.きのうは酔った。
k₁nu:] aNmai[tu pi:.きのうは私も酔った。

存在動詞では、レベルが少しずれるようだ。イルとアルでもレベルがことなる。

▽aNmai] utam.私もいた。
aNmaitu] uta₁.私もいた。
aNmai] u₁tu sta₁.私もいた。
aNmai] uritu uta₁.私もいた。

▽atamai] um.あしたもいる。
kare:] ata:[mai] umaNtu u₁.あれはあしたもここにいる。
upu₁a:] kamaNna:tu uri:ŋ.オジイはあそこにいる。いつも。<uri u₁
▽purimunu pStu[mai] utam.頭のおかしい人もいた。簡単な言い方。
▽uri:]tam.いたよ。簡単な言い方。<uri utam
▽ciro:maitu] uri.一郎もいたよ。海で見えてきて。簡単な言い方。
ciro:maitu] uta₁.一郎もいたよ。海で見えてきて。
ciro:mai] uritu.一郎もいたよ。海で見えてきて。
ciro:mai] uritu uta₁.一郎もいたよ。海で見えてきて。さらにはっきり
×ciro:mai] uri.不可。命令になる。

▽u[maNmai] atam.ここにもあった。
u[maNmaitu] ata₁.ここにもあった。
a₁]tu s₁.あるよ。ものを見て。
×umaNmai aritu.不可。
×umaNmaitu ari.不可。

▽ari:]tam.あったよ。<ari utam
umaNmai am.ここにもある。簡単な言い方。ていねいさがない。
umaN ari:m.ここにある。簡単な言い方。ていねいさがない。
umaNmai ari:m.ここにもある。簡単な言い方。ていねいさがない。

・(～tu)ta₁–tam–ta:

終止形の～ta₁あるいは～tamを～ta:と発音することができる。その結果、<簡単なあっさりした言い方>になる。

ka[te:] fki:tassuka[tu] a[me:] flfa]tata₁.風は吹いていたけど、雨は降らなかった。てい

ねいな感じ。

ka[te:] fki:tassuka[tu] a[me:] f[fa]tata:.風は吹いていたけど、雨は降らなかった。かんたんな感じ。 <ta₁

sskata]karipa[tu] kSka:tata:.汚いから使わなかった。 <ta₁

sskata]kari[pa] kSka:tata:.汚いから使わなかった。 <tam

ara:] mmitatam.私は濡れなかった。

ara:] mmitata:.私は濡れなかった。よりかんたんに言う感じ。

a: ma:Nti: kanakaija [mma]katam.ああ、そうそう、むかしはおいしかった。

a: ma:Nti: kanakaija [mma]kata:.ああ、そうそう、むかしはおいしかった。

これらとは逆に、焦点化助辞の使用が<ふつう＝基本>であることから、焦点化助辞の複数使用という現象がおこる。

・ tu+tu

u[ri]maitu [fai]tu.この人も食べた。

umaNtu] hasinutu a₁ [i]ra:.ここに橋があるねえ。見つけて。

m:natu] itasitu] ne:N.ぜんぶ出した。箱の中身を。

kanu] sarau[pa:] taro:katu pa₁tassuka[tu unu] sarau[pa:] aka [pari.あの皿は太郎が割ってしまったけど、この皿は俺が割ってしまったんだ。

関連資料

金田章宏「宮古語大神方言のとりたてにかかわるいくつかの文法現象」沖縄言語研究センター一定例研究会 (2022.05.07)